

花蕾締まった状態で収穫

— 鮫島 國親



花蕾（からい：つぼみ）と柔らかい花茎部分を食べる野菜です。一般に広く消費されるようになったのは昭和50年代以降です。ビタミンC、カロテン、カルシウムなどを豊富に含んでおり、サラダやシチュー、いため物などさまざまな料理に幅広く使われています。

花蕾は花芽が分化、発達したものです。この花芽分化には一定の低温が必要で、その程度は品種で大きく異なることから、品種を組み合わせると長期間収穫が楽しめます。今回は夏まき及び秋まき栽培を紹介します。

生育適温は15～25度、発芽適温は15～30度です。耐寒性が強く、霜害を受けることは少ないです。肥よくな土壌で、保水力があり、排水のよいほ場が適します。連作やアブラナ科野菜の跡地は避けましょう。作型は夏まき（7月中旬～8月下旬）と秋まき（9月上旬～10月中旬）が一般的です。育苗方法は地床育苗とセル成型育苗があります。



最近多いセル成型育苗について紹介します。市販の培土を128穴トレイに詰め、一穴に一粒ずつ種子をまき、覆土してかん水後、新聞紙で覆います。発芽後、新聞紙を除き、適宜かん水します。育苗期間中は防虫ネットをトンネル状に張り、さらに高温時は日中遮光を行うとよいです。

本葉2～3枚で根鉢がくずれなくなったら定植します。育苗日数は25～30日です。本ぼには1平方メートル当たり苦土石灰100グラム、堆肥2キロ、化学肥料120グラム（三要素15%の場合）を目安として施します。栽植密度はうね幅60～80センチ、株間30～40センチ、一条植えとします。一般に早生種では狭く、晩生種では広くします。追肥は1カ月後から生育に応じて20グラム/回を2～3回行い、同時に中耕、土寄せをして倒状を防止します。

して倒状を防止します。

収穫は花蕾が十分発達し、締まった状態で行います。収穫が遅れると花蕾がゆるみ、花蕾粒が大きくなります。収穫期は夏まきで11～1月、秋まきで1～3月ごろです。品種によっては頂部の花蕾を収穫した後、脇芽からの収穫も楽しめます。

（鹿児島県農業開発総合センター副所長）

平成20年8月14日（木）／南日本新聞